

教育・研究・地域連携の一体的推進事業 実績報告書

責任者氏名	上原栄一郎	所属	作業療法学科
-------	-------	----	--------

埼玉県立大学におけるアントレプレナーシップマインド醸成に向けたプロジェクト

1 事業活動の実績報告について（2026年3月末）

「概要」 2025年度は以下のPJT1～8および追加PJTの活動を実施した。

PJT1：EP教育導入に向けた実態調査と課題分析（2026年度研究倫理延長申請済）
アントレプレナーシップゼミ学園祭活動で一部データに対応した調査実施

PJT3：地域住民向けアントレプレナーシップ講座（まちなかキャンパス講座と連携開催）

2025年7月29日
地域住民12名、大学院生1名、教員2名、職員1名

地域におけるアントレプレナーシップ教育の役割
アントレプレナーシップで地域の子どもの成功体験
世代複合型プログラムの意義などを概説

PJT5：外部講師によるアントレプレナーシップ体験プログラムデモ（8/9-10を予定）

開志専門職大学阿部先生ら3名による 2日間デモプログラム実施
一体的推進事業独自広報ポスター、一斉メールなどで告知公募した。

外部講師 3名
学部生 15名
大学院生 6名
教員 5名
職員 1名

グループで導入ゲーム、紙タワー、ビジネスゲーム、フィールドワーク、
などでビジネスアイデアや地域課題の解決を提案するピッチ体験をすすめた。

PJT6：学内教員・学生メンター企画によるEP体験プログラム試行

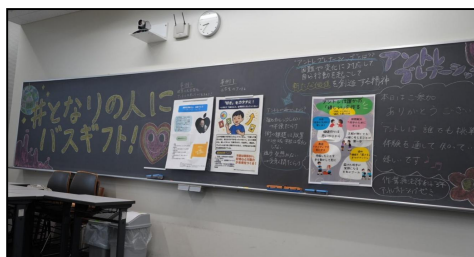
1) オープンカレッジプログラム（9月20日） 9時～12時15分



大学生メンター4名が中心となってプログラム進行を担当した。
高校生 7名
大学生 2名
教員 2名+ 職員 1名

「自分で考え、動く」講座としてオープンカレッジ講座と連携し
アントレを知り課題解決アイデアをグループで考えピッチした。

2) 学園祭アントレゼミ バスボム作り企画（10月25日）10時～15時



学生メンター7名が創作物作りを通じ担当した
地域住民 19名 + 未就学児6名、小学生5名
高校生 3名
大学生 20名
大学院生 1名
教員 3名
アントレプレナーシップを広報するとともに量的調査を実施した。

3) 複合型 挑戦体感型プログラムとして(1月31日)10時~15時



教員講師中心にプログラム進行を担当した。

地域住民 8名

高校生 1名

大学生 1名

教員 6名+職員 1名

オープンカレッジ講座と連携し、

地域課題の解決を提案するピッチ体験を実施した。

(PJT 報告は日本作業療法学会の演題エントリー済み)

PJT 7: 保健医療福祉系大学における EP 教育教材とガ

イドラインなどの小冊子の発行



「保健医療福祉のアントレプレナーシップ」を3月14日付で発刊済

ISBN: 978-4-600-01695-1 C3037 非売品

埼玉県立大学 アントレプレナーシップ出版部発行

約100ページ 執筆者共同活動教員13名

作業療学科, 看護学科, 社会福祉子ども学科

地域連携センター(理学療学科), 健康開発学科の

学外協力各教員が分担執筆にて作成

学内外の研修会や学生教育などで活用予定

本テーマを扱う書籍は日本初と考えられる

PJT 8: 教員研修会参加活動

県産業支援課や埼玉大学との諸会議や研修活動に複数回, 複数人が参加

追加PJT: 武蔵越生高校2年生60名の5時間プログラム実施: 2026年2月21日

「新しい挑戦を応援するアイデア」をテーマに、地域住民8名も参加し多世代混成型の複合型アントレプレナーシッププログラムの開催となった。量的データも多数得られており後日分析して論文化する予定である。



未実施PJT: PJT 4 (保健医療福祉分野における EP 教育ベースモジュールの開発)と
PJT 2 (EP 教育講演会)は未実施に終わった。

「活動実績」

①教員と学生がともに取り組んだ方法

PJT 6を中心に教員と学生がともに取り組む構造を積極的に創り出し、学生が各プログラム進行を講師役として行い実践体験を重ねた。またそれらの研究データ分析や卒論を中心とする論文化などに努めた。

②地域に根差した(教員と学生が地域に入り込む・地域住民と関わる)活動内容

各PJTにて高校生および地域住民参加型プログラムを展開し、その活動意義や課題を確認した。特に世代が違う影響は大きく、成果が上がる例と逆に取り組みが停滞する例があり、そのファシリテーションやプログラム構造などの検討が必要であった。

③教育・研究・地域連携との関連性

教育としてPJT 連携してプログラムを展開し学生を参画させた。

研究として各プログラムでは量的データ取得を行い調査実施し、学会報告や論文化に努めた。

地域連携では高校生や住民参加を依頼し、地域連携センターと協働しプログラムやまちなかキャンパス講座などを実施した。事業では常にその3要素の一体的推進に努めた。

④学生の主体的活動(アクティブラーニング)内容

PJT 6を中心に学生は、プログラムの主催者となり、事前学習、開催準備、広報、プログラム実施、データ分析、論文化など積極的に取り組み成果を収めた。

⑤その他（①～④以外の活動実績として記載する事項があれば記入）

日本作業療学会（2026年11月）、アントレプレナーシップ教育セミナー開講依頼あり。

作業療学会ではじめてアントレプレナーシップをキーワードに開催される教育セミナーが開催される。講師は京都アントレプレナーシップ開発センター原田先生、座長は作業療学科上原で登壇する。本学の一体的推進事業などの取り組みが保健医療福祉分野では稀であり、その成果や課題も話題になる。

「得られた成果」

多数のPJTを開催し参加動員を一定に得たこと

8つのPJTのうち、2つのPJTは実施できなかったが、追加PJTを含め多数のプログラム実施の機会を得た。直接参加した学生教職員のみならず、活動を展開することで大学内外の方々がアントレプレナーシップ教育を知り関心を集めたと思われ、一定の醸成目的は達成していると考えられた。

学内外からの一定の認識を得て協力依頼などを得たこと

作業療学会登壇などの機会
近隣高校からのプログラム依頼
県機関や近隣大学からの連携依頼
アントレプレナーシップに関する講座担当 など

各PJTにおいて一定の研究知見を得たこと

今後データ分析を経て論文化し公表する。

「現状の課題と今後の展望」

2025年を踏まえ2026年度の一体的推進事業への事業計画を推進する。継続的なPJTのみならず新規PJTを計画しており、より一層の協力体制を得ていく必要があり、学内外の皆様との連携を模索する。

2025年度～大学院リハビリテーション教育学Ⅰ「アントレプレナーシップ教育」、2026年度～専門職講座「専門職チームのアントレプレナーシップ概論」などアントレプレナーシップを冠する正規科目が開講されている。これらは一体的推進事業などの活動成果の一端であるが、単日の概論ベースの科目構成である。

今後、2027年度の新カリキュラムでは選択科目「アントレプレナーシップ支援学」が8コマで予定される。より体系的にアントレプレナーシップを学ぶ科目の開講により、学生や地域住民と共同創造するPJTで実装化を目指し、今後も取り組みを重ねていく必要性を共有したい。